

# 大分県 現代俳句協会 会報

第123号

令和3年8月31日



## 現代俳句歳時記 【向日葵（ヒマワリ）】

2メートルにも及ぶ真夏を代表する花。キク科の一年草。日車草、日輪草とも呼ばれる。大輪の黄色い花がおおらかで、いかにも夏らしい。北アメリカ原産。園芸用の小振りの品種も開発されている。

向日葵が挑み続けし昼了る

相生垣 瓜人

## 取りつき易く逃げ易い俳句

河野 輝暉

テレビでコマーシャルを見ていると、家庭用機器、例えば電気掃除機の特徴に、簡便、安易、手っ取り早い使い方が強調されている。これはどこか俳句と似ているので

は、と思う。俳句は五七五音という短くて簡便なもので、男女を問わず、誰にでも出来そう。ルールが唯一つ。十七音、それに季語を一つ入れることだけ。中には自由律、故意の無季俳句派もいるが。

それだけに好き易い飽き易い芸とも言える。原因は、世界最短短詩の奥の深さ、楽しさを味あわぬうちに止めることにある。肩肘を張らずに、俳縁を佳しとして勉強を継続することとを、作法テクニクを書く前にお薦めしたい。

方法は、主宰結社に入会、当県現代俳句協会の会員になる。地域の俳句仲間と清遊する。俳句入門書や一般教養書を読むなどを実践し、全国各地での俳句大会に応募して、入選を免かれても落胆して止めないことだ。

さて、俳句は五七五音（字ではない）だ。「飲んだら乗るな、乗るなら飲むな」こんな標語は何と立派に出来ていることか。

一方「菜の花は月は東に日は西に」（蕪村）の天地のスケールの大きさと月と日の絶妙なコントラスト。二つとも分かり易く普遍性がある。説得力がある。

もう一つ忘れてはならない事がある。それは人口に膾炙されやすいリズムなのだ。

日本語は母音が多く音楽的で古来より和歌、白隠禪師座禪和讃（はくいんぜんじざぜんわさん）の教文、詩文、演歌、標語などは、韻律の隠れた快感に頼っている点だ。「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則）という新古今和歌集は桜について古今で最も有名な作品の一つ。何故か。

若しこれを散文に解体し同じ意味で表現すると、「桜が散るのが惜し



河野輝暉顧問（くにさき公園 輝暉句碑前で）

くて心淋しいです」とでもなり、内容としては小学生でも持つ感情で、当たり前の心理現象。面白くも可笑しくもない。この歌を秀歌とせしめている本性は、流麗に流れ、つい口遊むことによるリズムの陶醉なのだ。俳句の五七五は規則や条例ではなく詩芸の必然性に由来していることを理解し、大切にしてほしい。

次に俳句は沈黙の文芸と言われる。最初から沈黙に縛られ、沈黙により解放される奇態なものだ、という訳の解らぬ相手であることを心掛けていなければ百年経っても人を唸らせる句は作れない。これは各人が勉強して会得するもので、初心者への解説は止めておくが、今後、心の片隅

に置いて置くとよい。とはいえ、矢張り触れたい。それは外国人と国民性が違うことからきている。今日でこそテレビではお笑い芸人が喋っていてうんざりだが、日本人は千古の昔より「言挙（ことあ）げせぬ国」「言霊の栄おう国」と言われ、寡黙を佳しという癖があった。「言つてしまやあ、おしめえよ」という台詞がある。「謂（言）ひ応せて何かある」——これは去来抄に見られる芭蕉の名言である。

言い尽くさないことよって、言わない無限の事を言うのが俳句なのである。パラドキシカル（逆説的）なのである。

同時に、俳句鑑賞者側にも責任がある事を抜かしてはならない。人の句を読む者に感情、想像力、教養、それに自身の広い体験ありてこそ、見る他人の句が立派になつたり駄句に落ちたりするのだ。

即ち俳句は作者と鑑賞者の二者が対等の立場で完成させる共同詩芸であり、民主的な楽しみの根底がそこにある、世界に無類の文学なのだ。

先に令和三年大分県現代俳句大会があった。二等に相当する大分県知事賞作品に「飛花落花どこへも行かぬ父の靴」（足立 攝）は好例だ。何故、どこへも行かぬ、のか。何の説明も無いのだ。

作者に答を聞いたり難解俳句だと難じるものではない。この作品を見た時、私には罪状にくれる体験が重っていた。わが次男が、「やがて死ぬけしきは見えぬ蝉の声」（芭蕉）の如く、朝、普通の様子で出勤した子が急死と電話があった。普段、帰宅したら靴は玄関の左隅に行儀よく揃えて脱いでいた。その靴を初盆を迎

える今も、恰（あたか）も元氣に出勤する、そしてほっと帰宅したかの様に安置している。攝さんの「どこへも行かぬ」とこしえの人生の孤愁が、平明な表現の中から沸々と胸に迫る。悲しい、父が恋しいなどと書いてないが故に、無限の共感が湧き出して、哀切に仕上っているではないか。

バイブルに「初めに言葉ありき」がある。一方、ノンバーランゲツジ（非言語コミュニケーション）と呼ばれる心理学の研究がある。アメリカの心理学者アルバート・マレービアン博士は、他人から受けとる情報の割合について、話す言葉の割合は七％に過ぎないと次の様な実験結果を発表。

- 顔の表情 五五％
- 声の質、テンポ 三八％
- 話す言葉の内容 七％

ついついコミュニケーションの主役は言葉と思われがちだが大間違い。正に俳句とは「言わぬが仏」の文芸と言えよう。偉そうな事を綴ったが諸氏の俳句の向上を祈念します。

以上  
（平協芸元会長・現顧問）

## 第24回

# 大分県現代俳句協会賞

## 応募締切10月末日

大分県現代俳句協会賞は、県協会の目指す俳句の方向性を内外に示すとともに、県協会の質的向上（応募者・選者とも）をはかる目的で制定されています。過去にのべ24名の受賞者を輩出しています。このほど第1回から現在まで、全ての授賞作品が判明しましたので、近く、県協会のホームページで紹介します。

この賞の意義は、受賞作品の発表や応募者の実力試しというだけでなく、協会内での俳句研鑽の気運を高めることや、選者間の議論によって選者自身のスキルを向上させることにあります。これは県協会が、大分県の俳句文化の向上に寄与しようとする上で欠かせないことです。県協会第30回総会では「ベテラン作家のいぶし銀のような作品だけでなく、より今日的な若い感覚の俳句も歓迎したい」と呼びかけています。事実

句協会賞を募集します。ふるってご応募ください。

### 〈応募要項〉

応募資格…県協会会員であること

(同賞受賞者は除く)

作品…20句一組(一人一編限り、タイトルを付加すること。令和2

年10月く令和3年9月の作品。既

発表、未発表は問わない)

応募用紙…横方向縦書きのA4原稿

用紙使用のこと(ワープロもこれ

に準ずる)。誰でも読める字で書

き、右の欄外にタイトル、左の欄

外に氏名(俳号)を明記する。

締切…10月末日(消印有効)

応募料…2千円・必ず作品に同封

すること

送り先…事務局(足立)まで

選者…成清正之、河野輝暉、谷

川彰啓、有村王志(選考委員長)、

あべまさる、上田たかし、伊藤

利恵(7人)

注意事項…作品は一句一句の出来

映えの他に、20句一組のタイトル

を含んだ完成度も選考の対象にな

ります。

・応募後の訂正には応じられませ

ん。返却はしないので、必要なら

コピーを取ってください。

・選考は、条件を揃えるために作

者名を伏せ、活字化して選者に渡

します。活字化の際は十分注意し

ますが、難読が原因による誤字は、

応募者の責任とします。

・令和2年10月く令和3年9月の

作品に限るという規定は、少しで

も違反すると失格になるというほ

ど厳密なものではありませんが、

著しい違反は減点になります。

・すでに評価の定まった作品(大

きな大会の上位入賞句等)の応募

は違反ではありませんが、選者を

試すようなマナー違反と捉えられ

ることがあります。著しい場合は

減点の対象になります。

本部誌「現代俳句」9月号の、

「地区の力・地区協会報を読む」

で、谷川彰啓氏の作品が取りあ

げられました

牡蠣する指の先まで日本海

谷川 彰啓

「大分県現代俳句協会報第122

号」より。荒海を前にして、その幸

である牡蠣を堪能している。「指の

先まで」に全身で雄大な自然と向き

合う実感がこもる。(高野ムツオ)

## 第2回雑詠句会「高得点句」発表

【19点】

一つずつ手離す 齡秋の暮

灘波 瑞枝

【14点】

どんぐりのまた青々と部活の子

神 慶子

跳び箱の突き手の先に春立てり

梶原 千代

月の射る土偶はああと言ひしまま

福田 英子

【13点】

結び目のほどけぬ余生枯むぐら

谷川 彰啓

【12点】

指切の小指がさわぐ夏祭り

井上 政人

【10点】

どの夢もいつか銀河へ消えてゆく

田口 辰郎

ストーブの猫やわらかくなるばかり

足立 攝

寒月を揺らして入る露天の湯

小川 良子

【9点】

あと少し笑顔を足して小春とす

田口 辰郎

枯草村に呼び込む道がない

上田たかし

未来凶へ飛び出してゆく冬木の芽

佐々木 玉

着ぐれて優しくさ少し置き忘れ

時松由美子

三月の色鉛筆に恋をする

陣野千恵子

言い訳はしないと決めた冬銀河

坂本 一光

薄水やきのうの嘘がばれそう

佐々木 玉

家族増え賀状はみだす笑顔かな

赤嶺 信子

鳥渡る鎖骨に神をやどらせて

河野 輝暉

【8点】

近くことも留まることも沙羅の花

森山 秀子

枯野きて句帳に残る風の音

立麻 琴路

ネクタイも名刺もいらぬ初詣

河野 則子

【7点】

古衣に色足袋合はず一葉忌

小野 智輔

障子閉めほどよき距離となるふたり

足立 町子

寒菊のひかりも母の忘れもの

足立 町子

百千鳥風青ければ青く鳴く

田口 辰郎

嫁入りの行李を捨てる梅日和

宮川三保子

しがらみが嫌いで空き家の烏瓜

有村 王志

【6点】

トラクター売って農家の冬去りぬ

加藤 征孝

己が影踏みつけつまづく冬の道

大川 千秋

ささくれのように西日が突き刺さる

平田千代子

豆腐切るまでの掌水温む

赤嶺 信子

この坂も越えてひと息着ぐれる

甲斐加代子

点滴の明日の手術や冬茜

安森 範明

枕辺に野辺広がりぬ虫時雨

福田 英子

妻旅におでん三日の鍋の底

甲斐 素純

廃線の駅に飾りし夏薊

森山 秀子

表札の護る空き家に春の雪

田代 直之

ホロホロと泣きたるごとく銀杏散る

井上 政人

鶯餅の粉を払えば飛び立てり

梶原 千代

密葬の貼り紙のあり大根引く

福井トミ子

忠告に背を向け歩く冬の道

飯田 幸子

理不尽も無理も受け入れ年明る

早澤まり子

### 第13回九州地区現代俳句大会

担当 原長崎・今回は投句のみ

● 2句1組千円（何組でも可）

● 締切9月11日 未発表作品に限る

● 原稿用紙の投句も可 住所 姓号

（ふりがな）、電話を明記のこと

● 投句先 85218125

長崎市小峰町3の6 倉田明彦様

# 連載・俳句講座 〈第1回季語について〉

「教会の影響力を広げよう」という平成30年からの取り組みで、全会員の半数が新会員という状況が生まれています。会報122号で呼びかけたように、「教会に教えあい学び合う気風を」作ることを求められています。その一環として今号より実践的な「俳句講座」を開始します。

もとより現代俳句は、さまざまな考え方で成り立っています。掲載された内容は執筆者からのアドバイスであり、当協会がその考えで運営されているわけではありません。しかし、あれもこれもと表面をなぞるのではなく、納得できるアドバイスには徹頭徹尾したがってみるのが俳句上達の鍵です。自分の考えを活かすのは、ある程度俳句が理解できてからが効率的です。このコーナーの意見や要望、執筆者を募集しています。

## 季語について

季語について書いてほしいという事務局からの依頼があり、今日までの長い間「季語」を特別に意識して俳句を作ったことがないのでやや戸惑いもあったが、折角のことでもあり、改めて整理するという考えから少し述べてみたい。

もともと俳句には季題（季語）があつて、その季語を決まり事として使用することを要件とする、いわゆる有季定型を主導する「俳人協会」があることは周知のとおりである。

一方、現代俳句協会は様々な考え方の集団で個々の判断、口語、文語をはじめ多様な自由な立場での主張

## 有村 王志

があり、当然ながら無季俳句も存在する。

その前に、俳句を作る過程で、まず、自分（生活場）の周辺の四季折々の対象物として時候、天文、地理、生活、行事、動植物を取りまとめた、いわゆる歳時記がある。現代俳句協会は結成五十周年事業の一貫として太陽暦による「現代俳句歳時記」を刊行している。

また、大方の人は季語についてぼんやりとしてではあるがその輪郭は掴んでいると思われる。しかし、改めて季語とその位置づけ、役割といった創作過程と密接に関係してくると、

ぐるぐると試行錯誤・暗中摸索が続くことになり一作品の形成までには何度でも変化していくことになる。

○ 私自身は昭和四十七年から金子兜太を師として「海程」に所属し、兜太の薫陶を受けてきた。この兜太の季語を含めて創作への考え方を、（多くの書評のなかから）提示した方が各位も納得がいくものと思料。例示して大方のご判断をいただきましたと考えている。

『短詩形の今日と創造』（昭和四七年刊）  
兜太が「今日の俳句」―古池のわびよりダムの感動―を世に送り出

して七年目に「俳句」―短詩形の今日と創造―を1972年七月十日に発行している。往時、俳句の理論武装の必要を痛感していた折のこの出版物は、多くの俳人を魅了したものである。

○ この中で、兜太は季語とは何か、について次のように述べている。

俳句には必ず季語が入るべきである―といわれている。季語は俳句の「約束」であるから、これの入らないものは俳句に非ず、というわけである。しかし、この考え方は堅すぎと思う。が、季語の良さを知っておく必要がある。そのうえで季語の約束に拘束されない俳句の展開を期待している、とある。この文中の「堅すぎると」という表現は当時の時代的背景を感じることが出来る。表現者としてはこの記述で十分かと思われる。

○ 兜太はまた、常々、季語にはこだわっておらず「季節感」があつた方が良く指摘をしてきた。

兜太自身無季俳句は沢山存在する。思いついただけでも

白い人影はるばる田をゆく消えぬために  
三月月がめそめそといる米の飯

暗黒や関東平野に火事一つ

谷に鯉もみ合う夜の歓喜かな

黒い桜島折れた銃床海を走り

などである。

今日たたいまのあらゆる事象を形成するその対象物にどう立ち向かうのか、作者の「主体（感性）」が問われることになる。季語の使用はそれぞれ価値判断による以外にはないわけで、そのうえで、季語の働き、言語空間、情感のたゆたゆ感などを確保するには、やはり、切字効果、二物衝撃が好ましい。例えば、

中村草田男の

降る雪や明治は遠くなりにけり

降る雪の明治は遠くなりにけり

前句の「や」の切字効果、後句になれば説明、散文で味もそっけもない句になってしまふ。

最後に無季俳句をいくつか紹介しておく。昭和初期の作品。

河終る工場都市にひかりなく

窓秋

石膏像の眼玉の白き文化祭

白虹

あまりにも石白ければ石を切る

白泉

戦争が廊下の奥に立ってゐた

白泉

困憊の日輪を転がしている傾斜

赤黄男

このほか一貫して無季俳句を提唱した林田紀音夫（十七音詩）の作品を紹介したい。彼は人間存在に深く関わり、無季俳句を主張、生涯その姿勢で貫いた。

鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ

黄の青の赤の雨傘誰から死ぬ

いつか星空屈葬の他は許されず

星はなくパン買って妻現われる

## 季語に関する二、三のこと 伊藤 利恵

俳句をはじめて日の浅い方から「季語は必要ですか」という問い合わせが多いと聞きました。

現在、日本の俳句作家の姿勢としては、有季、定型、文語を死守する立場から、無季、口語、自由律までいくつもあります。それぞれにその拠って立つところを明らかにしながら（それでも明らかにできないものも抱えながら）特に支障なく俳句を作っているといったところででしょうか。以前は有季派と無季派で激しい論争があったようですが、1996年、夏石番矢さんが、季語に変わるものとして「キーワード」に着目し、「現代キーワード事典」というのを

洗った手から軍艦の錆よみがえる  
騎馬の青年帯電して夕空を負う

（林田紀音夫全句集）傍線は筆者による

### 《参考資料》

兜太の「俳句」短詩形の今日と創造・「俳句の作り方が面白いほどわかる本」・「自分の俳句をこう作っている」

出して以来は、「無季」に言及する大きなウェブはないようです。

私ははじめ「口語・自由律」で作っていました、長いブランクのあと、今は「口語・定型・時々無季」のよくな作り方をしています。そして今後は「文語・定型・時々無季」で作りたいという気持ちがつよくなっています。

ところで「有季」という言葉は「無季」という言葉に比べて少し落ち着きの悪い言葉ではあります。「無季」という言葉に対して出てきた言葉だからでしょうか。どこか、とりあえずといった風な、あまり思

い入れの無いそんな言葉の響きです。

言い換えればそれだけ俳句の過ぎゆきの中では「季」が当たり前の前提としてあるわけです。ですから「無季俳句」はまだ圧倒的にその数が少なく、したがって「秀句」も、その数においては「有季」の俳句と比較にならないと思います、その中で私が好きな俳句を次にあげてみます。

母逝きて夜の石橋すべて石

澁谷 道

無方無時無距離砂漠の夜が明けて

津田清子

照葉樹林無頼もお通し下さるか

中尾和夫

疑えばきりなく淋しいパンの耳

瀧 春樹

死ぬるときにさびしいだらうな土ふま

田中いすゞ

すきとおるとは太鼓をたたいてとある

安部完一

生き急ぐ馬のどのゆめも馬

攝津幸彦

鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ

林田紀音夫

水たまりに映る世界に入りましよう

加藤太郎

折り鶴ですみんな重手をはずしている

中村加津彦

捨てし田を豊葦原へ還しけり

大屋達治

草原に人獣すなおに爆撃され

阪口涯子

黄泉路にて誕生石を拾ひけり

高屋窓秋

唇を三つ重ねて電話の忌

田中信克

折り鶴は紙に戻りて眠りけり

高橋修宏

林間を人ごうと過ぎゆけり

金子兜太

朝風呂や羽化の時間を疾うに過ぐ

矢野千代子

闇に鳥を放つ痛みや投函す

佐藤清美

端正な横顔を見せる句から、ちよつと笑える句までタイプはいろいろですがどの句にも「季」を入れる隙間が無いような独立性があると私には思えますが、いかがでしょうか。詠もうとする対象への感動や、詩的興奮などがあえて「季」を入れずとも俳句作品として成立する要因だと思ふのです。

ただこれらの俳句はほんの一例で、あまたの無季俳句は、なかなかこうはいきません。その原因の大きな一つは、「自我の突出」にあるように

思います。無季俳句はその十七音をともすると、自分の思いを述べることのみに使ってしまうという甘くて怖い穴に落ちてしまいがちなのです。そうするとなんだかだらだらと締りのない、俳句でも川柳でもない不思議な一行ができてしまうのです。

そんなことをつらつら考えておきますと「季」の働きのひとつに、自我の一時預かり所というか、他者との懸け橋になるもう一つの目というか、そんな一面があるように思えます。俳句を作るときに出てくる、どうしようもなく野放図で排他的な自我を、季語は「まあまあ、そう言わんと」と宥めながら、他者の心にも届き易いよう一肌脱いでくれる、世話好きな近所のおばちゃんのような役割を果たしてくれるありがたいアイテムでもあるように思えます。

俳句に季語を入れるというのは、自分を「季」という他者に預ける方便でもあり、短文学として極めて優れたシステムだと思ふのです。

そして、私の俳句における態度の大きな後悔の一つに、季語の勉強をおろそかにしてきたことがあります。優れた歳時記は読み物としても面白

く、美しい写真はおろそかならぬ詩情を与えてくれることを、なんとこれまで充分に知らずにいたのです。日本人が季節の移ろいに心を寄せ、わが身に引き入れるまで見つめた、その気持ちの集大成である歳時記を、七〇の手習いよろしく、とても尊いものに思うこのごろなのです。

「季語は必要か」という問いに対しては、「絶対必要とは思わないけれど、季語を学ぶことは人生を豊か

## 歳時記と遊ぶ

歳時記には、私たちが忘れてしまっている風景、昔見た風景でも、近頃は親しめなくなつた風景をいつも再現してくれます。

私は特に写真いりの歳時記に惹かれます。吟行に出かける時には、丹念に読んで対象物を頭の中に入れておきます。実物と出合った時、その美しさや動きに驚き、新鮮な感情が伝わって来るのです。

俳句で大切なのは、他の人と同じ発想をしていないかを考えることです。作り方を教えてもらっても、人真似で終るのではないかと常に頭の中に入れておくことが大切です。作

にすること」と答えたのです。私の「時々無季」の姿勢は、季語の恩寵をいいただきながら、無季の俳句を作る体力も残しておきたいと思う気持ちからです。

そして暦の問題だけでなくここ数年の環境の変化等、季語はこれからも増え、変化していくことと思いますが、新しい季語を磨き詩語に昇華させることも、私たちのおおきな仕事のひとつと思ひます。

## 上田たかし

句が三年以上になると、自分の個性を發揮して発表する意欲が必ず生まれます。

歳時記の中には、ことばの歳時記（山本健吉）や、類語辞典（たとえば三葎草俳句類鑑辞典）もあります。これは、ことばの重複を避けることと、説明的になるのを無くすために大切なので、まだ使用されてない方は、是非一読してほしいと思ひます。

心の落着をなくすと、同じ季語を並べたり形ができると、一句だと思ひ込みます。俳句の中には、美しいとか寂しいという感情はみんな共通

しています。それは句の中に、自分の思いを込めて詠むからです。

俳句は形は小さいけれど、内容は季語のほかは自由です。その点作者の個性を生かすことができます。自分の特長を十分に發揮して臆することなく、挑戦されることを期待しております。



## 季語の主人になろう

## 足立 攝

俳句とは何かを考えた時、ぼくは「俳句の形式で書かれた詩である」と考えている。これまで請われるままにいろいろところで書いてきたので、「耳にたこ」という人もいるかも知れない。しかし大事なことで、もう一度整理してみる。

「俳句の形式で書かれた詩」とは文字通りの意味で、それ以上でもそれ以下でもない。やれ俳句は季節の詩であるとか、挨拶と滑稽とか、座の文学であるとか、定型・季語・切字（あるいは切れ）は俳句の三要素である……とか、とにかくいろいろなことを言う「先生」が多いが、そんなものは一切関係ないというのが、ぼくの結論である。乱暴に聞こえる

かも知れないので、少し詳しく見ていこう。

さて、世界最古の小説は何かご存じだろうか。シエークスピアを思い浮かべる人が多いと思うが、彼が活躍したのは日本に換算すると戦国時代以後で、全く新しい。今からたか

だか四百年ほど前である。ほぼ定説になっている世界最古の小説は、何と日本のもので、平安時代中期の源氏物語である。（あるいはほぼ同時期に書かれた竹取物語）もう千年も前の成立である。

同様に世界最古のエッセーは、源氏物語と同時期に書かれた枕草子である。世界最古の小説とエッセーが、

ともに日本であるというのは誇らしいことであるし、その作者が紫式部と清少納言という、ともに女性であることも注目値する。

それでは最古の俳句はいつ誕生したのだろうか。古い「俳諧」を、近代文学としての「俳句」に進化させたのは、かの正岡子規であるが、今からわずか百二十年ほど前のできごとである。俳句ではなく、その前身の俳諧を見ても、成立は松尾芭蕉の江戸時代で、今から三百五十年ほど前である。驚くほど新しい。

なぜこうした文学の成立史をたどったかという点、小説やエッセーの千年にも及ぶ長い伝統に比べて、俳句の歴史はきわめて短いこと、つまり俳句はごく最近できた新しい文学であることを確認したからである。

すると変だとは思わないだろうか。歴史の長い小説やエッセーに対しては伝統文学などとは言わず、俳句にだけはとてつもなく大きな伝統を要求するこの風潮はどうしたことだろうか。いまだに着物で正座し、短冊や色紙に筆ですらすらと書くのが正式な俳句であるというイメージを持っている人が多いのではないだろうか。

それに迎合するように、テレビの俳句番組等はどれも伝統を強調したもののばかりだ。

もちろんそれが悪いといっているのではない。「吉野のとりめし保存会」のように、過去の伝統に手を加えず、そのままの形で未来に伝えていくことは、人間の崇高な営みのひとつである。崇高であり人類にとつて必要不可欠な仕事ではあるが、しかしその仕事は芸術でない。ここが肝要である。

要するにぼくは、俳句と俳句史は違うと言いたいのだ。どちらも全生涯をかけて研究する価値のある分野かもしれないが、しかし前者は芸術であり、後者は芸術ではない。芸術とは現代に向き合って開かれ、進化していくものであるからだ。言い方を換えれば普遍性のあくなき追求、それこそが芸術である。

だから俳句を俳句史の延長に位置づけるのは根本的に間違っている。誰も「小説を語るなら、源氏物語を読んであらにせよ。坪内逍遙の小説神髓を研究してあらにせよ」などとは言わないだろう。

ペンでも紙でも、携帯電話でも、今の形になるまでにはどれも長い個

有の歴史を持つ。伝統がある。伝統は何も俳句に限ったものではないし、俳句がことさらに伝統と親和性が高いわけでもない。

もういい加減俳句は、他の文学と同様に、あらゆる過去の足枷から逃れ、純粹に現代に向き合う文学になっても良い時期ではないだろうか。冒頭でぼくが、「俳句とは俳句の形式で書かれた詩である」と書き、「それ以上でもそれ以下でもない」と言ったのは、こういう思いを込めたかったからである。

季語や切れ字、定型、文体（現代表記・歴史表記等）……など、これまで俳句個々の作法と思われていた一つ一つを、現代の視点で整理することが必要である。この考察は、そういう立場で書かれたものである。

文学とは何かを論じる紙面のゆとりはないが、ごく一般的に定義すると、文学は他の芸術と同様に「精神の表象」である。つまり感動、不安、怒り、自虐……のように見えない「思い」を、他人に見える形に変換して提示することだ。絵の具やブラシ、ペンというようにジャンルによって手段は違うが、精神の表出

（表象しようとする行為）である点には変わらない。すなわち描きたいのは精神であり、季語や切れ字といった俳句の約束事は、その精神を生き生きと描ききるための単なる道具に過ぎない。こんな当然のことをいまさら声を大にして言わなくてはならないところが、俳句の後進性だとはぼくは思っている。

いつの時代でも、「現在」は歴史の中で最新の「今」である。しかし昭和の中頃まで、人々の暮らしは自然が直接支配していた。稲を植えるのも、漁に出るのも、自然を読み違えると待っているのは死である。人々は自然とともに生き、喜びや悲しみのすぐ背後には自然があった。日本の美しい四季の中で日本人は生まれ暮らし、死んでいった。このような状況下で季語は生まれたのだ。花鳥風月を主題にしている季語が多いのは当然のことである。

だから季語を活かすといっても、その活かし方を考えなければならぬ。現代のハイテクノロジーの社会は、もはや季語を必要としなくなっただのかと言えは、それは全く「否」である。冷害に泣き、台風に怯える

暮らしは何ら変わらないし、高層マンションのベランダにも朝顔は清楚な花を咲かせるだろう。

しかし一方で労働人口の大半が務める近代的オフィスは、一年中空調が効いている。自宅や工場の中もまたしかり。人々の喜怒哀楽は、自然の中限定ではなくなつたし、ますますすなくなろうとしている。

あの東日本大震災を詠んだ高野ムツオ氏が、「震災の句を詠もうとした時、みやびな季語が邪魔になつた」と語っていたのは象徴的である。季語は精神の表出に役立つ時は大いに利用すれば良いし、不要な場合は、何ら遠慮なく捨てればよいというのがぼくの考えである。

では、なぜ季語は役に立つのか、役に立つことが多いのか。かつて季語の考え方についての金子兜太氏の話聞き、まさに目から鱗が落ちた経験がある。

「季語とは季節感とともにある事物を指示しているばかりでなく、その事物への人の感受やもの思いが含まれている。〈もの〉と想いの二重構造」と言ってもよく、〈ものを美意識化したところに現出した「造語」〉と言つてもよい」（金子兜太ら編

「現代歳時記」）

そう、朝顔という季語は、単に朝顔という「もの」をあらわす単語ではなく、朝顔をとりまく日本人の情感、朝のすがすがしい花、可憐な花、やがて萎む儂い花……等々といった全ての情感が折り込み済みの〈造語〉であるのだ。一般名詞の朝顔に比べて、季語の朝顔は、字面は同じでも大きく違う。込められた情感を文字で表現しようとする時、優に数百字に値する。それが季語の形づくられた伝統の重みである。わずか十七音の俳句にあつて、季語を使う経済効率は計り知れないほどに高いのだ。金子兜太氏の定義は、ぼく自身の経験に照らしても素晴らしく正しい。これ以上に正鵠を得た定義を、いまだにぼくは知らない。

だから「畦道に飛び火している曼珠沙華」のような句は、十七音を使って季語「曼珠沙華」を、ただなぞっているだけの駄句として捨てられるのである。

さて結論である。

（一）精神を表出するために利用するのが季語である。季語は道具であり使いこなすものだ。季語に隸属させられるのは本末転倒である。

(一) 季語は単なる季節の言葉ではなく付随する情感を取り込んだ、言わば造語である。だから十七音の俳句にとって季語はものすごく効率のよい道具である。

(二) 精神を表出する上で季語は役に立つことが多いが、不要な時は遠慮なく捨ててよい。一句に季語をいくつ使っても、使わなくても問題ない。精神の躍動が描かれているか

どうか、唯一の基準である。

これにぼく自身の経験を付け加える。

(四) 季語とはそういうものであるが、その前に俳句とはどういうものかを会得しなければならぬ。奇をてらわず、最初には有季定形をしっかり学習することが、自己の俳句を確立する上で一番の早道である。

## 季語の誕生

川柳、短歌、詩と俳句との違いは、「季語」という。その季節を示す季語の存在であります。「季語」は俳句にとって「発句は当座の季を詠むべし」という偶然的約束から出たもので、全く形式上の一約束として認められたものに過ぎなかったと言われております。

正岡子規は季語の持つ連想力を強調し、この連想力によって初めて十七文字という短い詩の世界が広い外界を獲得するのだと言い、結果「普通に通に季を挿むを善しとす」と結論づけました。

## 谷川 彰啓

虚子は「俳句の目的は花鳥風月を諷詠するにある。少なくとも今日以後の俳句は、そういう標識の下に進むべきものである」

——こうして俳句にとって最も大切な季語、季題が誕生しました。つまり俳句をつくる上で大事なことは「季語・季題」を挿入することだと結論づけたのです。

## 追悼・大川千秋さん

飯田 幸子

七月九日、大分津留句会の大川千秋さん（八十三歳）が信号のない横断歩道を渡っているところを、二十代の男性の運転する軽自動車にはねられて急逝されました。翌日の朝刊でそれを知り愕いていると、栃木から駆けつけた大川さんの娘さんが、私の友人に付き添われてやってきました。「母が死ぬ前にこれを机の上に残していましたので」とさし出したのが、私宛の見慣れた筆跡の封書でした。中には今月の句投が書かれ

ていました。

大川さんは、はじめ締め切り日に私の家まで歩いて投句に来ていました。歩いてくるのは大変でしょう。特別に電話で受けつけますよとすめましたが、以後郵便での投句になりました。

数ヶ月前には、長く看病したご主人を見送り、「惜別の空を広げて春の鶯」「春風に誘われ黄泉の人となる」と詠んで、私は深く感銘をうけました。俳句が大好きで楽しんでいました。俳句が大好きで楽しんでいました。大川さん。私が俳号の「千秋」の名付け親でした。心から「冥福をお祈りいたします。

## リレーエッセイ 連載 ⑦

# 「私と俳句」 鎌倉真由美

## 稲妻の光に晒す白い肌

この句との出会いが、私の俳句との原点と言えるかもしれません。

二十四年前、私は盲養護老人施設の相談員として働いていました。そんな中、施設利用者さんの余暇活動の一つとして俳句教室が設けられることになり、私が俳句教室の担当職員になったのです。これが俳句との

関わりをもつきっかけでした。

俳句教室の先生は工藤俊等先生。

ボランティアで月一回、施設の方へ指導に来てくださいました。朴訥なのに温みのある、優しい目をした先生でした。俳句教室の内容は、視覚障害を持つ利用者さん七、八人と私とで投句をし、先生が作評、添削、解説をして下さるといふものでした。久しぶりの勉強会に利用者さんも新



この子規の考えを引き継いだ高浜

鮮な喜びを感じているようでした。

○ 仕事の一貫として関わっていた俳句でしたが、ある時、先生との雑談の中で、先生が冒頭の稲妻の句を教えてくださいました。

いま考えると、稲妻と光を同時に使うなど、おかしなところもあります。私はまったくの素人だったので、間違っているのかもしれないし、前後の会話も覚えていないし、先生の意図もわかりません。

しかし、この稲妻の句は衝撃的でした。リアルでエロチックで、俳句なのがいいの、と。

ドラマみたい、とつぶやく私に、先生は「だから面白いんだよ」と笑いました。

十七音で描ける官能の世界。俳句

が頭の奥にこびりついた瞬間でした。

○ そんな俳句との関りも、僅か一年で終ることになります。法人内移動があり、他施設の勤務になったのです。移動先の特別養護老人施設は、介護保険制度に変わった直後で、仕事は多忙を極めました。仕事に、事に、家族の介護にとフル回転をす

るかたわら、社会福祉士の資格取得にも挑戦しました。五十を過ぎてからの国家試験勉強は心身共に堪え、二回の不合格の後、三回目でやっと合格することが出来ました。

嬉しかった。スポーツも勉強も、これ以上無理というところまで努力した事がない私が、初めて努力で合格を掴み取ったのです。涙ぐんで喜んでくれた義母と夫に感謝です。

○ いま思うと、この頃が最も充実した日々だったのかも少し残念。

○ そして退職を一年後に控えた平成二十三年、小中学校の同級会で足立町子さんに逢いました。彼女を含む何人かで談笑している中、柔和な町子さんが、少し熱を込め語って



工藤 俊等 先生

いた俳句の話に聞き入って、いるうち、あの稲妻の句が甦ってきたの

です。私も俳句を作りたい。町子さんに頼み込み、地元の狩野句会に入会する運びとなりました。入会後に知っ

たのですが、狩野句会の代表上田たかしさんが、現在、工藤俊等先生の後を引継ぎ、盲養護老人施設の俳句教室を担っているそうです。俊等先生が狩野句会へ導いてくれたのかも少し残念。

○ そんなこんなで、ふわふわと入会したものの、句会で発表する自分の句が、あまりにもみすぼらしく、ど

んとんやる気が失せていきました。そんな私を懸命に指導してくれたのが足立攝さんです。時にスバリと辛口評を、ごくたまに秀逸の文字で飴をと、一句一句添削、解説した文章はプリント十枚に及ぶこともありました。そうしてゆっ

くり俳句脳に導いてくれたのでした。この十年義母や実母の病気や介護

等々、様々な事情がぐるぐると私を回し、怒ったり、嘆いたり、人並みに苦労という状況も経験しました。眉間に皺を寄せ、語気を荒げる日々の中で、ふつと自分に戻れる瞬間、それが俳句に向い合う時間でした。車の中に、ベッドの枕元に、食器棚の横に鉛筆と俳句ノートを置き、ごまかしたい難問に当たると俳句ノートに逃げたものです。

○ 月一回の句会も楽しみです。句会の日にはピアスををし、お気に入りの洋服を着て、自分の中に特別感を演出します。

狩野句会には不思議と魅力的な人が集まります。今は体調をこわされて入院している梶原千代さん、清田幸子さん、灘波千代美さん、みなさん八十代の先輩ですが、大好きな句友です。一日も早く回復される事を願うばかりです。

○ よく下手の横好きと言いますが、私がそうです。俳句俳句と連呼している割には思うような俳句が作れません。

○ そんな私にも夢があります。十七音の官能小説を作ることです。以前、句会の中で、目標は十七音のポルノ



と言った事があります。反応は今いちで、やっぱり邪道かと思っていたのですが、唯一足立攝さんが「面白いいね、ポルノいいよ」と句会后、声をかけてくれました。こうなると百人力です。今も変わらず夢を追いつけています。

口紅を少し濃くして木の茸風  
ぶらんこの揺れにまかせたデートの夜  
ペランダの女透けゆく月の秋  
初デート送り送られ栗の花  
七夕の夜は幼女のふりをする

## 句会探訪 ⑩

### 合同句会・吟行会

コロナ禍で多くの会合がふたたび中止に追い込まれ、暗い気持ちになつている会員も多いのではないだろうか。

県協会ではこういう状況の中でこそ必要な「独学・独習」を呼びかけ、支援する体制を整えつつある。本号からスタートした会報の「俳句講座」もその取り組みの一つである。

また県協会は、会員相互、また一般人に声をかけ三人以上の句会や勉強会を開催することを呼びかけている。新人であっても、その中に一人でも会員がいれば講師の派遣や



した楽しい時間を過ごした。(このコーナーの記事を募集します。取材にも伺います)

会場費の支援などを行う。

その取り組みの一つとして、8月25日に大分句会、子鹿句会、三重狩野句会の有志が集合して吟行会が開かれた。吟行場所は狩野句会会員の吉田素子氏の「浄運寺」。豊後大野市の観光案内に載るほどの、きれいに整備された境内を吟行した。参加者は六名で全員県協会会員である。昼食のあと市役所二階の中央公民館会議室で、勉強会を行った。十時から十六時まで、充実

とはいえ、年を重ねると感性はくすみ、あの稲妻の句のように、ドキツとしてエロチックなのに粘つくかない俳句ができません。

俳句雑誌を読むと、エロスのきいた、でもいやらしくない俳句が掲載されています。こんな私でも、いつかきつと……。

八十、九十になつても、真面目に、生気に満ちた官能俳句を作る。そして「ああ面白かった」と一生を終わりたいです。

(かまくらまゆみ)

### 《新会員紹介》

竹田 英人(佐伯)

荒れくれの己が手に触れ父徳を

衛藤 俊一(大分)

盆踊りあの娘の姿のみ探す

時松由美子(九重)

山藤のこぼれ落ちたる男坂

岡村 君香(豊後大野)

向日葵や一人泣き止み一人泣き

### 《退会》

小野 智輔(8月1日付)

### 自薦作品募集

◇当季雑詠4句を、同封の投句用紙、またはハガキ、メール等でお送りください。

◇締切は十月四日(月)消印有効

◇第二回雑詠句会の選句・選評締切と同じです。

◇詳しくは句会報13ページ参照



## 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志

### 《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://gendaihaiku.net>

E-Mail: [info@gendaihaiku.net](mailto:info@gendaihaiku.net)

令和三年八月三十一日発行  
会報第百二十三号  
発行人・有村 王志  
発行所・大分県現代俳句協会  
編集人・足立 攝